

Living the Lotus 9

Buddhism in Everyday Life

2026
VOL. 252



**8月25日、台北教会が「盂蘭盆会・中元普度法会」式典を厳修
二日間の法華三部経通読供養を経て捧げた真心の祈り**

**Living the Lotus
Vol. 252 (September 2026)**

【発行】 立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 前田 貴史
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

一人ひとりが一燈を点じよう

庭野日鑛
立正佼成会会長



鯉沢教会の入仏式後に行なわれた「会長先生結縁のつどい」で、盆栽松に砂入れをする庭野会長。盆栽松は、旧道場の庭野会長お手植えの松から挿し木したもの（今年6月、山梨県富士川町の小学校体育館）

暗黒を嘆くよりも

いま現在も、世界の各地で多くの人が戦争や圧政のために苦しんでいます。ローマ・カトリック教会の教皇レオ十四世聖下は、この春以降「戦争を終わらせ、平和と和解を促進する努力を」と世界のすべての為政者に呼びかけ、「自己崇拜と金銭崇拜を止めよ。力の誇示を止めよ。真の強さは、いのちへの奉仕において示される」と強調されました。

ところが前代未聞のことに、そうした教皇聖下のメッセージに非難の言葉を向ける一国の指導者もいて、人間にせつかく与えられた心と言葉を使う能力が、争いと不調和を招くことに使われるのは残念に思います。そして、そういう状況を嘆いて、傍観するしかない私たちなのです。

ただ、そのような先行きの見えない暗黒にも映る世の中であっても、一人ひとりにできることはあると力強く訴える立言があります。東洋思想家として知られる安岡正篤師の手になる「一燈照隅行——万燈遍照行」というものです。

「暗黒を嘆くより一燈をつけよう／先ず我々の周囲の暗を照らす一燈になろう／微かなりとも一隅を照らそう／手のとどく限り、到る処に燈明を連ねよう／一人一燈なれば、万人万燈である／日本はたちまち明るくなる／是れ我々の一燈照隅行即万燈遍照行である／互いに真剣にこの世直し行に励もうではないか」

立言のなかの「日本は」の部分は、もはや「世界は」といったほうが適切でありましょう。また、「世直し行」とあるのも、一人で何か大きな変革をもたらすことではなく、先月お話しした「人のために火をともしば」の延長線上にある、身近な実践を呼びかける言葉と私は受けとめています。



ローマ教皇聖下は「ほんのわずかな信仰さえあれば、人類として、人類と共に、この歴史の激動の時に共に立ち向かうことができる」とおっしゃっていますが、一人ひとりの日々の実践が一隅を照らすともしびとなり、それが何億、何十億となるとき、真っ暗な宇宙空間でひととき青く輝く星にふさわしい、明るい地球の未来が期待できるので

手のとどく限り

この立言のなかの「手のとどく限り、到る処に燈明を連ねよう」の一節も、「手のとどく範囲で」と読めば、自分にも無理なくできる身近な布施行が、暗黒の世を照らす光明となることを教えています。そう考えると、今月の十日に、本会の脇祖さま（長沼妙俊）のご命日である「報恩会」を迎えることが、偶然ではないような気もするのです。

脇祖さまは、ふれあう人をみな、おなかを痛めたわが子のように思い、ときに厳しくもあたたかな指導をしたことで知られています。まさに「到る処に燈明を」連ねるような慈悲行に徹し、目の前に困っている人がいれば、食べ物もふとんもお金も、そのとき着ている自分の服さえもためらうことなく差しあげたそうです。すべてを「仏さまからの預かりもの」と受けとめ、一燈を点じつづけたのでした。

私たちの日常に目を転じて「手のとどく範囲」を見てみれば、家族はもちろん隣近所の人や電車やバスで隣りあわせた人、コンビニのレジに並んだ前後の人なども手のとどく範囲の人です。そういう人たちへの笑顔や感謝、それに困っている人に手を差しのべることも、周囲を照らすともしびとなります。家族への労りや感謝の言葉は家庭を明るく温めるともしびとなり、苦難のなかにいる遠い国の人を思う祈りもまた、尊い一燈です。そして、国や民族や宗教の違いを超えていま、世界じゅうの人が同じ思いで平和のともしびが遍く広がることを念じているに違いありません。

「他のために点じた一隅を照らす灯は、いつまでも消えることはないのです」という開祖さまの言葉を通して、私たちは足元の実践を倦まずたゆまずつづけてまいりましょう。

（『佼成』2026年9月号）



「精進に終わりなし」を胸に、心新たに日々の修行を

ロサンゼルス教会 増野直美（選名・匡代）

立正佼成会の信仰に出遇ったのは、いつごろ、どのようなきっかけだったのですか？

大阪で生まれ育った私は1980年に結婚し、その嫁ぎ先が大阪教会の会員の家庭だったことが信仰するきっかけでした。夫をはじめ義父と義母も熱心な会員でしたから、昼も夜も支部の会員や青年部リーダーの出入りが非常に多い家庭でした。結婚した翌年の1981年に長男を授かったものの、80年代後半からのバブル景気に浮かれた夫は毎晩のように外泊や朝帰りをくり返し、夫婦関係は徐々に悪化していきました。家庭を顧みることのない夫に対して、「もうこのままでは一緒に暮らせない。できれば離婚をしたい……」と思うようになり、しばらくの間、長男を連れて夫と別居することにしました。

そんな私の身を案じた地区の組長さんや主任さんが頻繁に手どりに来てくださいました。当初、私は居留守を使っていたのですが、何度もアパートに来られるサンガ（同信の仲間）の優しさや思いやりに心を動かされ、長男の手を引きながら少しずつ大阪教会に通うようになりました。教会では組長さんや主任さんたちが「最近どう？ 困ったことあらへん？」「何かあったら遠慮せんと言うてな」と私のことを気遣い、また幼い長男の面倒も見てくださるおかげで、ご命日式典やお当番修行に参加するようになりました。

いちばんつらい時にサンガの人たちが親身になって関わってくださったんですね。

その後も私は夫と話し合いを続け、何度も離婚届を持っていきましたが、そのたびに夫に離婚届を破られてしまいました。私は不安でどうしていいかわからず、当時の支部長さんに夫との関係で悩んでいることを打ち明けました。すると支部長さんは「ご主人との問題は、あなたに必要あつての修行なんよ。離婚するのは簡単やけれども、今のあなた自身の心を変えない限り、また同じような苦しみを味わうよ。離婚するしないは仏さまにすべてお任せして、今はとにかく一心に仏さまの修行をさせてもらいましょ」と厳しくも優しい言葉で私を包んでくれました。そのお言葉を信じて、私はひたすら手どりや法座修行をとおして自分の心を深く見つめました。

するとまもなくして、不思議なことに長い間頑なに離婚を拒否していた夫がすんなりと離婚届にサインをしてくれました。離婚の条件は長男の親権者を私にするこ



増野直美さん

とだけで、養育費や慰謝料はなしということで合意しました。そして1991年に離婚が成立し、それぞれ新たな人生を歩むことになりました。

その後、女手一つで長男を育てていくには経済的な苦勞をはじめ、たくさんのつらいことはありました。母親として、わが子を守り抜くという意地と強さは持っていたものの、時に心が折れそうなこともありました。そんな時、必ずサンガの皆さんが私を励まし、寄り添ってくださいました。

そうした多くの人たちの支えがあればこそ、長男を抱えながらも昼間は生命保険会社で働き、夜は支部青年女子部長として手どり修行に歩けたと思っています。時には青梅練成会や七面山参拝にも参加し、一生懸命青年部活動に取り組むことができました。今振り返ると、長男は小さいころから仏さまのそばで育ち、素直で優しい人間に成長してくれたことに心から感謝しています。

その後、渡米するまでの経緯について教えてください。

離婚した翌年の1992年2月、学生時代の友だちと観光旅行でアメリカ・ラスベガスを訪れた時、私は運命に導かれたかのようなタイミングで現在の夫と出会ったのです。当時、彼はロサンゼルス旅行会社で働いていて、ラスベガスで観光客のガイドをしていました。私たちが日本からラスベガスに旅行で来たことを話すと、彼がよく行くレストランに連れて行ってくれ、初対面にもかかわらず意気投合し、楽しく食事をして別れました。そしてその三日後、再び彼と出会ったのです。その時、私はまるで映画や小説のように偶然とは思えないほどの驚きと強い運命を感じました。そして食事をして別れ際に「もしも大阪に来られる機会があったら連絡してください」と彼に電話番号を伝え、友人と私は翌日帰国しました。

それから半年ほど過ぎた頃、本当に彼が仕事で大阪に来ることになり、私は彼と感動的な再会をしたのです。そうした思いがけないことがご縁となり、お互いに離婚を経験して独身だったことから、私たちは1993年11月に再婚しました。彼からのプロポーズの際、「結婚しても立正校成会の信仰は続けます。また、私にとってかけがえのない息子も一緒にいます」と自分の気持ちを正直に伝えました。



ご家族と：夫(左上)、長男(左下)、お孫さん(右上)



1996年、ロサンゼルス教会の皆さんとアリゾナ拠点のご本尊ご安置式に参加して(前列右が増野さん)

彼は以前、東京・杉並で暮らしていたこともあり、立正校成会の大聖堂の存在は知っていました。また両親を亡くしていて、アメリカで先祖供養ができるということもあり、私が立正校成会の信仰をすることに理解を示し、もちろん長男のことも快諾してくれました。そして1994年5月、私は中学2年生になった長男と共に渡米することになったのです。

ロサンゼルス教会では日本語支部の支部長をされてきたのですね。

私は2003年から主任と婦人部長を兼務させていただき、2007年からは日本語支部長のお役を20年近くさせていただいてきました。渡米した当初は異なる文化や習慣の中で戸惑うことが少なくありませんでした。校成会の修行においても日米の違いを感じました。日本では協調性や和を大切にする文化があります。そのため例えば、幹部さんの指導に対して、「はい、わかりました」とか「そうですね」と同意する人が比較的多いと思います。しかし、アメリカでは一般的に「私はこう思います」とか「このように考えます」と自分の意見や意思をはっきり自己主張する文化があります。どっちが良い悪いということではありません。私はアメリカの会員さんとふれる中で、それぞれの国の文化や価値観、国民性に違いがあることを認め合い、理解し合うことがいかに大事かということを学びました。

現在、自宅があるパームスプリングスからロサンゼルス教会までは約200キロ離れていて、車で約2時間かかります。若い頃は日帰りで道場に通っていましたが、現在は毎月のお当番修行などは泊りがけでさせていた

Interview

だいています。車で道場に向かう途中、教会から遠距離に住み、赤ちゃんや幼い子どもを抱える会員さんを誘いながら、お当番修行やご命日に参加するように努めてきました。そして、お役をとおして自らの信仰心を深めるとともに、かつてサンガにしてもらったように人さまのつらさや悲しみに寄り添うことを心がけて、これまで多くの会員さんたちと関わってきました。

立正佼成会の教えの中で心に留めているものはありますか？

「自分が変われば相手が変わる」という教えを深く心に刻んでいます。今の夫と結婚した当初、私には「教えたるか！」と言わんばかりに無意識のうちに上から目線の言葉が出てしまうことがありました。すると、夫から「教えてもらおうなんて思っていないよ」と私の思い上がりを指摘する言葉が返ってきて、自分自身の高慢さに気づかされ、あらためて私の強い人間であることを思い知らされました。そして同時に、すべての縁から学ぶことの大切さを認識し、自分を変え、成長させることができると実感しました。

切さを認識し、自分を変え、成長させることができると実感しました。

今年6月に日本語支部長のお役を退任されましたが、今後どのようなお気持ちで修行に取り組まれるか聞かせてください。

会長先生は日ごろから、「精進、精進、死ぬまで精進、生まれ変わったらまた精進」と教えてくださっています。お役を退任しても仏さまの修行は続くわけですから、これからも会員綱領にある人格完成を目指して日々精進を重ねていくつもりです。私が尊敬するお一人でロサンゼルス教会元相談役のグリミツきぬよさん（故人）は、高齢のため支部長を退いても同年代の会員さんを自ら運転する車に乗せて、毎月のご命日には必ず参拝されていました。グリミツ元相談役さんを信仰者の鑑とさせていただき、「精進に終わりなし」を胸に今後も一人の信仰者として新たな気持ちで修行させていただきたいと思っています。



2026年3月29日、ロサンゼルス教会の日曜式典で講話を行なった前田国際伝道部長（前列中央）を囲んで（前列左から4人目が増野さん）



法華經と四諦の法門

ドミニク・スカランジェロ
立正佼成会国際アドバイザー



法華經の如来神力品に示される「即是道場」は、私たちが家庭や職場、学校など、日常生活のあらゆる場所を修行の場として教えを実践できるよう、そっと背中を押してくれる教えです。

集諦の実践

前回は、マインドフルネス(「今・ここ」に意識を向けること)とボディフルネス(全身の気づき)を活用し、自分の願いと現実との隔たりに苦しみを感じる瞬間を自覚することを通して苦諦を実践する方法について考察しました。自らの苦しみを正直に認め、自分が問題を抱えていることを受け止めたなら、私たちはすでに最初の大きなハードルを乗り越えたこととなります。しかし、そこで立ち止まるわけにはいきません。仏さまは苦しみを何とかしたいと願う私たちに、原因の探究という次のステップに進むことを教えてくださっています。

仏教では、欲望(貪欲)が苦しみの根本原因であると説明されることもあれば、物事の本当のすがたに対する無知(無明)が苦しみの原因であると説かれることもあります。しかし、この二つは互いに相反するものではありません。「無明」とは、自己に対する誤った捉え方、すなわち心の奥深くに根を張っている自己中心性のことです。無明は単なる考え方ではありません。私たちの世界の見方そのものに深く組み込まれているものです。この自己中心性から、現実を自分の願いどおりにしようとする強い欲望(強いこだわり)が生まれます。さらに私たちは、物事を自分の思いどおりにするために行動し、その結果、自分自身にも周囲の人々にも苦しみを与えてしまうことになるのです。

ここで一つの例として、若かった頃の私の体験をお話したいと思います。20代の頃のことで、ある大切な約束があって車で向かう途中、ひどい交通渋滞に巻き込まれたことがありました。いらだちが募り、やがて周囲を走る車がすべて、目的地へ向かう私の行く手を阻む障害物であるかのように見えてきました。隣の車に割り込みをされた

私は、ついカッとなってクラクションを鳴らし、相手のドライバーに大声を上げてしまいました。すると相手も同じように大声で言い返してきたため、交通渋滞に巻き込まれるというよくある出来事が、まるで地獄界にいるかのような苦しみの時間になってしまいました。

いったいなぜ、私はこのような状況を招いてしまったのでしょうか。もし私が割り込みをしたドライバーに対し、怒りをあらわにして大声を上げたりしなければ、言い争いは起きなかったはずです。したがって、争いの直接の原因は私の行動だったと考えることができます。

しかし、ここでさらに深く掘り下げてみたいと思います。というのは、その時、なぜ私はそのような行動をとったのか、その「なぜ」を本当の意味で理解しなければ、もしかしたらこれからも同じように怒りを爆発させ、同じような結果を招いてしまうかもしれないと思うからです。

この出来事が起きたとき、私はまるで固く巻かれたバネのような状態にあって、内側に溜まった負



のエネルギーが、今にも一気に噴き出そうとしていました。では、なぜ私の中にそれほどまでに強い負のエネルギーが溜まっていたのでしょうか。それは私が置かれていた状況、つまり約束の時間に遅れそうになっていたせいでしょうか。多くの人はそう考えるかもしれませんが、しかし、そのひどい渋滞に巻き込まれたドライバーの中には、同じように大切な約束の場所に向かいながらも、穏やかで落ち着いたままの人も、きつといたはずです。状況や条件だけが主な原因だったとはいえません。そこで、さらに探究する必要があります。

十如是を学んだ際にわかったように、人が特定の行動をとる可能性や傾向には、その人の心の状態が関わっています。では、そのときの私の心は、どのような状態だったのでしょうか。約束の時間に遅れそうな状況を受け入れられず、私の心は怒りに燃えていました。自分の力ではどうにもできない状況に置かれ、自らの無力さに直面していたのです。

そう考えると、原因はカッとなりやすい私の性格にあったといえます。

しかし、もう一層深く掘り下げる必要があるかもしれません。なぜなら、私たちの心の状態は、過去の経験によって形成されているからです。私たちの心の「如是性」には、過去の行ないが現在まで及ぼしている影響、すなわち過去の経験がもたらした「如是報」が反映されています。「如是報」が、私たちの心の状態に影響を与えているのです。したがって私の場合は、自分は感情的になりやすい

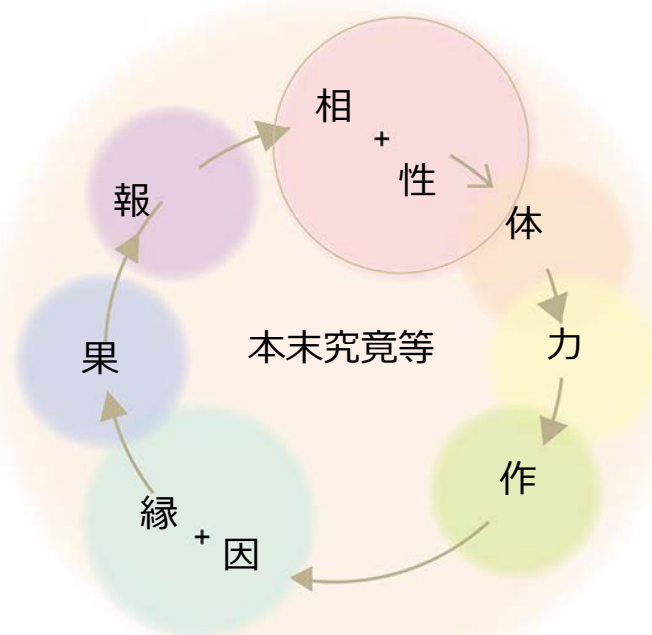
性格なのか、そして、もしそうであるなら、それはなぜなのか振り返ってみる必要があるのです。

子どもの頃の私は遅刻が多く、宿題の提出が遅れたこともたびたびありました。そのためまわりの大人たちから厳しく叱られ、家庭でも学校でも時間を守ることを強く求められました。それは私にとって、トラウマに近いものとなりました。20代の私が交通渋滞で感情的になったのは、一部には幼少期に時間を守れなかったことで味わったあのつらい経験を、二度と繰り返したくないという思いがあったからかもしれません。

そのように願うこと自体は、決して悪いことではありません。それは、自分自身を大切にしようとする自然なやさしさから生まれてくるものです。しかしこの時、私の願いは恐れや怒りという好ましくない感情へと歪んでしまい、その感情は現実を自分の望みどおりにしようとする行動となって表出したのです。

集諦を実践することは、必ずしも容易ではありません。時間をかけて正直に自分の内面を見つめ、心を開いてサンガの仲間と自分の感情や思考を分かち合い、自らの心を客観視することも大切になるでしょう。苦しみを乗り越えるためにはどうすべきか。その実践の道筋を明確に見出すには、問題の核心にまで迫らなければならないのです。

次回もこの例を取り上げ、苦を解決するために、どのように「道諦」を実践していけばよいか、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。





サンガの現場レポート

ブラジル教会長 佐々木廣海マリア

わが家には思春期を迎えた息子がいます。先日、私は急いでいたため、家の手伝いを息子に頼みました。「お願いだから今やってほしいんだけど」と声をかけたのですが、そのとき息子はちょうどゲームに夢中になっていました。

すると息子は、「えー、今は抜けられないんだよ！」と不機嫌そうに返事をしました。私もついイライラしてしまい、「ゲームばっかりやって！」と言い返し、口論になってしまいました。

今回の出来事を振り返る中で、私は親子げんかという苦の原因は、息子の態度そのものではなく、「今すぐ手伝ってほしい」「親の言うことを聞いてほしい」という、自分の思い通りにしたい気持ちへの執着にあったのではないかと気づかせていただきました。その執着が、イライラや怒りを生み出していたのです。

実はそのしばらく前、私は息子からお気に入りのズボンを直してほしいと頼まれていたことを忘れ、数日後に息子から「お母さん、ズボンはもうできた？」と聞かれ、「あっ、忘れていた。ごめんなさい」と答えていたことを思い出しました。

私はそのときのことを振り返り、自分は後回しにされたくないと思いながら、息子から頼まれたことは後回しにしていたことに気づかせていただきました。そして、私は息子がすぐに手伝ってくれないことに腹を立てていましたが、息子の態度は自分自身の姿を映し出してくれていたのだと反省することができました。

また、日頃から息子が家事を手伝い、私を支えてくれていたにもかかわらず、そのことを当たり前のように受け止め、感謝の気持ちが足りなかった自分にも気づかせていただきました。

そこで次からは、「手伝いをお願いしたいんだけど、何時ならできるかな？」と、息子の都合を尋ねながらお願いするようにしました。すると息子もイライラすることなく応じてくれるようになり、私自身も一日中モヤモヤした気持ちを引きずることがなくなりました。

この体験を通して、苦しいことやつらいことがあったとき、その原因を外に求めるのではなく、まず自分の心を見つめることの大切さを学ばせていただきました。まさに、苦しみの原因(集諦)は自分自身の執着であると、息子との関わりを通して身をもって学ばせていただきました。

おかげさまで、わが家は今、以前より穏やかで平和な毎日を送っています。相手を変えようとする前に、まず自分自身の心を調えることの大切さを、いつも忘れずにいたいと思います。

そして、「即是道場」の実践として、目の前に生起する出来事はすべて仏さまから与えられた学びの場であると受け止め、一つひとつの出来事と向き合いながら、自らの仏性を磨いてまいりたいと思います。これからも日々精進してまいります。

ありがとうございました。





慈悲心から生まれる厳しさ

厳しい言葉も素直に聞ける

立正佼成会開祖 庭野日敬



1993年9月、千代田教会（当時）ご巡教

この厳しい訓戒が、大きな慈悲から発していることはいうまでもありませんが、私がとりわけ感嘆をおぼえるのは、「水」というものを用いて戒められた深いお智慧です。「水」は本来、清らかなものです。お釈迦さまは、すべての人間が本来もっている「仏性」をその「水」にたとえて、「そなたは、もともと水のような清らかな本質をもっているのだよ」ということを教えられたのでしょう。

羅睺羅は素直な人間でしたから、そのお心をそのまま受けとることができ、そして立ち直ることができたのです。

ここに、お釈迦さまの指導力の秘密があるように思います。私が知るかぎりにおいて、どの経典を読んでも、お釈迦さまが「おまえはだめな人間だ」などと、相手の本質を否定するようなことをおっしゃることは、けっしてありません。戒めるときも、相手の心のもち方の誤りや行ないの過ちそのものを指摘されるのです。相手はそれが事実であることを自分でも知っているわけですから、素直に聞くことができるのです。素直に聞けば、厳しさが厳しさでなくなるのです。それが、仏さまの厳しさなのです。

職場においても、法座においても、ちょっと厳しいことをいう人は敬遠されがちです。しかし、相手の本質を認め、美点や長所を認めたうえでの厳しさなら、必ず理解されるはずで

副会長だった長沼妙佼先生(脇祖)は、「この人を本物にしくちゃならない」と思うと、箸の上げ下ろしにまで注文をつけました。ご法の行じ方はもちろんのこと、日ごろの生活での一挙手一投足を見ていて、こと細かに教えてくれました。

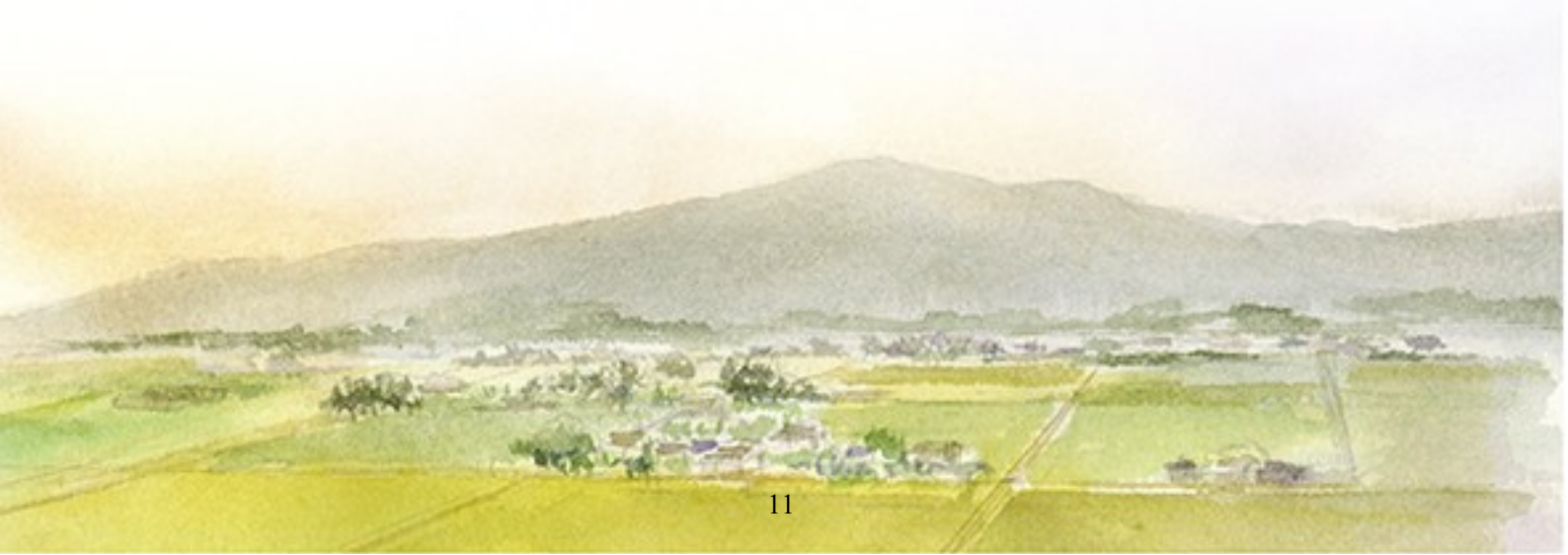
そのお陰で、幹部さんたちが姿勢をきちんと整えることができたのですが、妙佼先生のすばらしいところは、その厳しいお言葉の一つ一つが大きな慈悲心に発しているのがひしひしと伝わってくる所でした。親身になって、一人ひとりにこまやかな心くばりをされるのです。人は、相手がほんとうに自分を思ってくれているのを感じる時は、その叱責や忠告を前向きに受けとれるのです。

私の知人が、こんなことを話してくれました。少年時代に何かよくないことをして、叔父さんにきつく叱られたのです。そのとき、「頭のいいおまえが、どうしてそんなことをしたんだ」といわれたそうです。その「頭のいいおまえが」のひとつがズンと胸に響いて、叱られて恨むどころか、その叔父さんが大好きになり、八十歳を過ぎた現在までその言葉が心の支えになっているということでした。

それにしても、私たちが生活している現実の世の中は、お釈迦さまが「一切皆苦」と説かれたように、「苦」に満ちた厳しい世界です。その厳しい世界を生き抜いていくに、やはり小さいときから鍛えられて育つことが大事なのです。

そういう意味でも、人を育てるには、根本に100パーセントの愛情が必要ですが、時には厳しい言葉を添えて表現することも大切でしょう。

一方、私たちが現実の生活でいろいろな苦難に出会ったときでも、その奥に仏さまの大慈大悲が働いていることを忘れてはなりません。そして、その厳しさを素直に受けとめると、そこに幸せへの道が開けているのに気づくことができるのです。





「今、ここ」に一燈を点じよう

国際伝道部長
前田貴史

皆さん、こんにちは。「世界を平和にしたい」と願う人は少なくないはずですが、世界で起きている出来事はあまりにも大きく、自分一人の力では何も変えられないように感じる人が多いのも現実です。

私は普段、小さなバイクで通勤しています。ある日、赤信号で止まっていると、車いすに乗った方が歩道へ上がる段差で困っておられる姿が目に入りました。するとそこへ一人の学生さんが近づき、ごく自然に車いすを押し始めたのです。

その様子を周囲の人たちも見守り、無事に歩道へ上がった瞬間、その場は温かな空気に包まれました。

その学生さんは世界平和を実現しようと思って行動したわけではなく、ただ目の前で困っている人に手を差し伸べただけでしょう。しかし、その小さな行動は一人の方を助けただけでなく、周囲にいた人々の心にも灯をともしました。今月の会長法話に示された「暗黒を嘆くより一燈を点じよう」とは、まさにこのような姿ではないでしょうか。

7月の大きな地震で被災した熊本県の人々に向けて、多くの方が「自分にできることはないか」と心を寄せ、それぞれの形で支援を続けておられます。私たちの身近なところにも、目を向けてみれば、支援や思いやりを必要としている方々がおられます。

家庭での「ありがとう」、職場での「お疲れさま」、見知らぬ人への笑顔、相手の話を最後まで聴く姿勢——その一つひとつは小さな灯かもしれませんが、その灯は人から人へとつながり、やがて家庭や地域、そして世界を照らす光になっていきます。

世界平和への第一歩は、遠いどこかではなく、「今、ここ」で自分にできる一燈を点じることから始まるのではないのでしょうか。



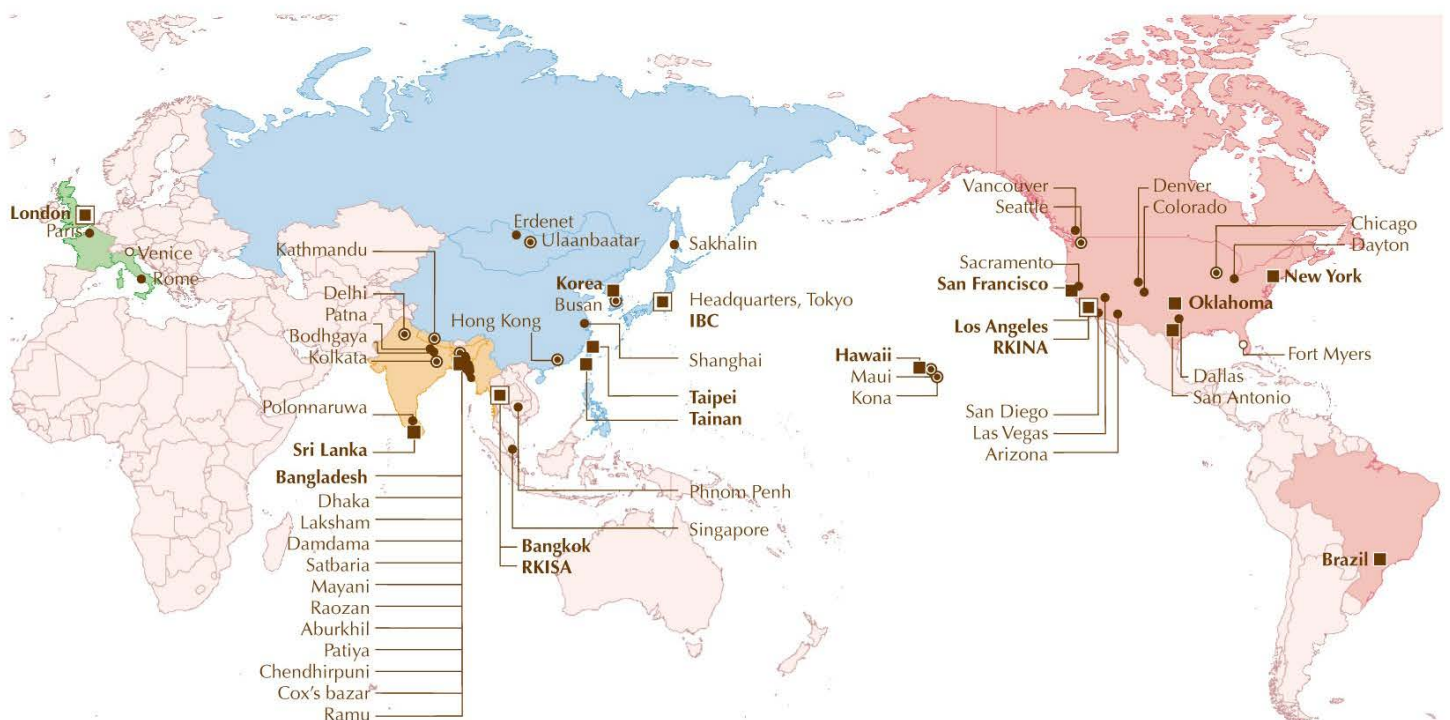
7月28日に発生したマグニチュード7.1の熊本地震。被災地では八代教会の会員と本部派遣隊が、水の搬入やがれきの撤去などの支援活動に取り組みました。

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about
local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter Living the Lotus: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp